

なすのV字仕立て栽培における整枝法について

1. 試験のねらい

本県におけるなすの栽培は、主枝、側枝ともほぼ放任に近い栽培が多かったが、最近、良品質、多収穫を目的としたV字仕立て栽培の普及が徐々にではあるが、増加している。しかし、側枝については、現在も放任されているのが多い。そこで、V字仕立て栽培における整枝法の改善をねらいとして、主枝本数、主枝の仕立て方、側枝整枝の有無が、生育、収量に及ぼす影響について検討を行った。

2. 試験方法

品種は、千両2号（穂木）、茄の力（台木）を用い、主枝本数（2・3・4本）と主枝の仕立て方（摘心側枝利用、慣行）とを組合せた6区（側枝については1果どり）と、対照として慣行主枝3本側枝放任区を設け、計7区とした。播種は昭和63年3月14日に行った。苗の摘心処理は、接木活着後、本葉4枚で行い、側枝を主枝とした。定植は慣行苗については6月6日に、摘心苗については6月10日に行った。栽植距離は、主枝2本区が200×30cm、3本区が200×45cm、4本区が200×60cmの1条植えで、 a 当たり主枝数を333本とし、主枝はV字型に誘引した。施肥量は基肥として各3要素とも3kg/ a 施用した。

3. 試験結果及び考察

生育は定植後から低温、日照、多雨条件であったため、全般的にやや緩慢であった。主枝本数別では主枝本数が少ないほど優る傾向が認められ、摘心区は若苗定植であったこともあって、初期生育が慣行区よりやや優る傾向であった。

収量の比較では、主枝本数別では、主枝2本区が3・4本区より収穫全期間とも多収で、 a 当たり総収量、可販収量は主枝2本、3本、4本の順に多収であった。主枝の仕立て方別では、慣行区が前期収量では摘心区より多収であったが、収穫終了時における a 当たり総収量、可販果収量は共に同等であった。側枝の放任と1果どりの比較では、 a 当たり総収量は放任区が多収であったが、収穫後期に不整形果等不良果が多く、可販収量は同等であった。

4. 成果の要約

なすのV字仕立て栽培における整枝法について検討した結果、主枝本数は2本が優れ、主枝の仕立て方としては、比較的収穫期間の短い露地早熟栽培では慣行育苗でよいと思われた。側枝の整枝については、今後可販果率向上のためにも行う必要があると思われた。

（担当者 野菜部 和田悦郎）

表-1 生育及び収量

No	処 理		茎径 (mm)		1 茎当たり時期別収量 (g)				同左比 (%)
	主枝	側枝	7月7日	終了時	前期	中期	後期	計	
1	慣行 2 本	1果どり	8.6	12.7	324	613	499	1,436	84
2	" 3 本	"	7.3	11.2	213	588	461	1,262	74
3	" 4 本	"	6.8	10.6	175	592	451	1,218	72
4	摘心 2 本	"	8.7	12.1	217	697	491	1,405	83
5	" 3 本	"	8.3	11.9	186	617	395	1,198	70
6	" 4 本	"	7.0	11.0	165	597	457	1,219	72
7	慣行 3 本	放 任	7.6	12.8	231	808	664	1,703	100

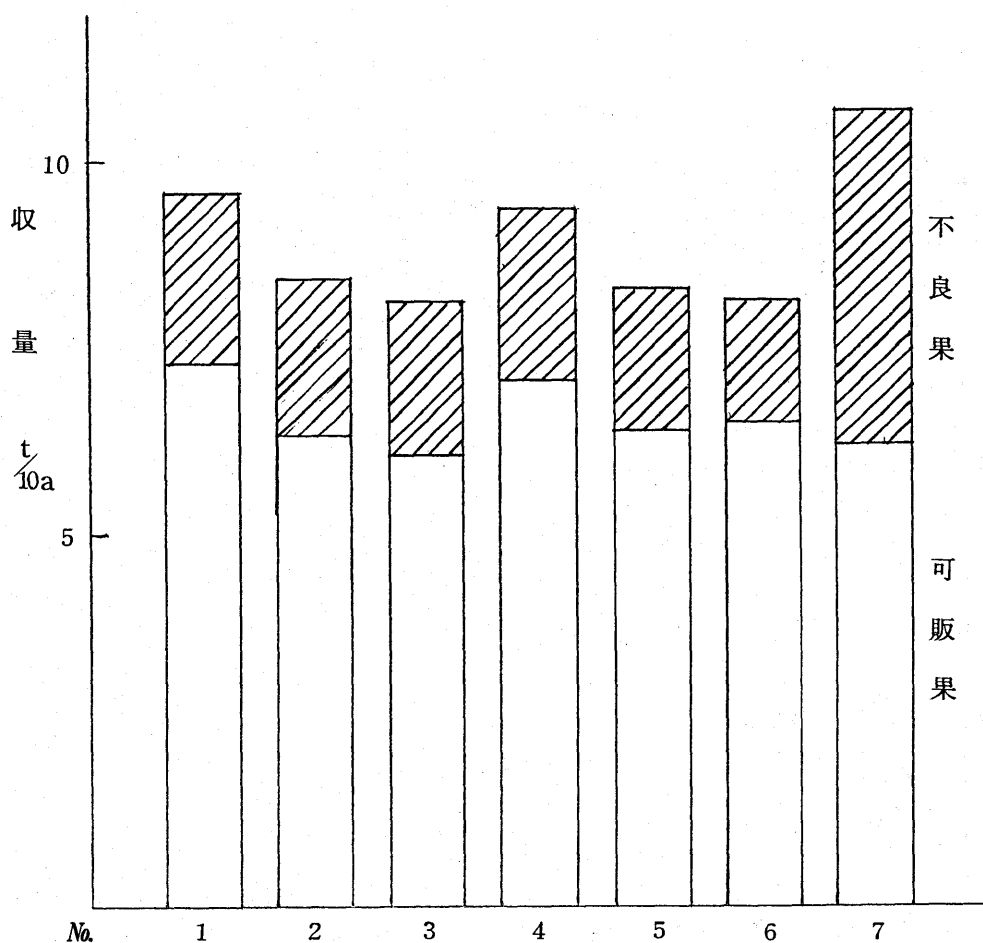


図-1 10 a 当たり規格別収量